

しまのうち しまのうち【島ノ内】

しもかわら しもがわら【下川原】 【蒲沼下川原】

しもがわら

「シモ」は上流に対する語。かわら川原は字句の意味通り。

1987年三浦鉄郎著 新編・秋田の地名

しもがわら

渡船場は現在大川・一日市をつなぐ籠馬橋からおよそ100m下流で、大川側は木役所付近であった。この木役所は馬場目川を下りてきた木を点検・検査・集積する文字通りの役所で、藩政期から機能し、明治・大正、及び昭和に入っても利用された所という。現在の桜庭家付近がその中心地に当たる。一日市側の上陸地点は、対岸の下川原であった。ここを現在「コエパ」・「コエバ」と呼んでおり、その語源について二つの由来があるが、恐らく「越場」であろう。街道はそれから現在の一日市町の中央通りに入り、右に折れて上町・中町・下町を真北に直進した。

「歴史の道調査報告IV北部羽州街道」秋田県教育委員会

しもだい たい【小池岡本下台】

台はもともとたい岱とかかれたものか。たい岱は天地の神をまつた場所。山地を意味する。「シモ」は上に対する語。

1987年 三浦鉄郎著「新編・秋田の地名」

じゅうはちさか じゅうはちさか【十八坂】

(浦横町の小立花から入り、たらい盪沢から市野へ抜ける峠道)

十八坂

かど鹿渡の山中に、二つ続きの山坂がある。昔、十六歳と十七歳の二人の姉妹がいた。二人の継母は毎日ひどい仕打ちをしていたというが、ある時、

「この山坂を越えないうちに、歩きながら十八むすびの麻苧を績み終えろ、できなければ家に帰ってくるな」ときびしく命じた。

娘たちは泣く泣く出てゆき、績み疲れて妹はたおれ死んでしまった。そこをうば坂といい、姉もついにたおれ死んだが、そこを、あね坂といい、両方の山坂を合わせて、村人は「十八坂」とよぶようになった。

出羽の伝説から 山本郡琴丘町伝承

じゅうはちさか (小池に残る御前柳神社の縁起から)

(浦城主、三浦兵庫頭)盛永の側室 小柳御前 年十八歳。永禄八年、浦 落城の際、懐妊して臨月に当たり退去の途中、小池の辺 十八坂(産子坂とも云う)において男子を分娩す。云々とある。

1913年 一日市村郷土誌

*じゅうはちさか 角館の近くにも十八坂という地名がある。ここではキリシタンだということで追われ、角館から逃げてきたお園という18歳の娘がこの坂で捕らえられほりつけ磔にされて殺された伝説の地名。

(1988年 むめひろし著 はなし地名譚

じょうふくいん【浦大町 常福院】

開基開院は不詳です。天正15年(1587)、秋田久保田村の宝篋院より快順上人が入院し常福院中興の初代住職となりました。その節上人は森山の東谷寺から慈覚大師作と伝えられる薬師如来を勧請、当院の本尊として、毎年旧暦8月8日に薬師講を催していましたが、昭和20年(1945)一日市町の大火で類焼し、堂宇伽藍とともに焼失してしまいました。

同22年(1947)工藤萬治郎氏が焦土に建つ仮本堂に寄進された延命地藏仏を本尊と仰ぎつつ、平安時代よりの昔以来、すべてを包み込んだ弘法大師の法灯(真言密教)を今に伝えています。

現在の本堂は昭和43年(1968)12月に建立され